

道徳性及び価値意識の発達に関する日中間の比較¹⁾

竹内謙彰・金美玲²⁾
(愛知教育大学)

Comparison of the Morality and Value between Japanese and Chinese Adolescents

Yoshiaki TAKEUCHI and Meiling JIN
(Department of Psychology)

問題と目的

1. はじめに

本研究は、日本と中国における文化的な差異が青年の道徳判断にどのような影響を与えるかを検討する一つの試みである。

本稿で主として焦点をあてるのは、道徳発達の文化普遍性を仮定する Kohlberg によって構築された道徳発達段階の日中間比較である。近年、心性の文化普遍性を前提とする考え方に対しては、文化心理学の立場からの根本的な批判がなされるようになってきた (e.g., 北山, 1997)。そうした状況のもとで、文化普遍性を前提とする道徳発達段階の枠組みを文化間比較に適用することは、やや古めかしい議論を再度持ち出すことになる感を読者にもたらすかもしれない。実際、データの分析に当たって、本稿では Kohlberg の道徳発達段階の枠組みを採用している。しかし、得られたデータを解釈するに当たっては、発達段階の「高低」を単純に優劣に還元するのではなく、文化的な価値観の差異が反映されているとみなすべきであると筆者は考えている。いわば本稿の問題意識は、「普遍性」のものさしを二つの異なる文化に当てはめてみたときに生じる差異から、二つの文化の違いを探ろうとするものである。

冒頭で、「一つの試みである」と述べたのは、ある一定の視点から差異を見ることで探索的に文化的な差異を探ろうとする試みだという含意である。³⁾

2. 道徳発達の文化普遍性を仮定する Kohlberg, L. の理論

従来、道徳性は主として次の三つの側面から考察されている。それらは、情緒的側面、行動的側面および認知的側面であるが、本研究で取り上げるのは、認知的側面に焦点をあてて、文化普遍主義的立場からアプローチを行っている Kohlberg の道徳発達段階理論である。

Kohlberg は、道徳発達に関して以下のような3つの水準および6つの段階を提唱している (e.g., Kohl-

berg, 1971)。

レベル1……前慣習的水準

段階1……罰と服従への志向。罰や制裁を回避し、権威に対し自己中心的に服従。

段階2……報酬や利益を求め、素朴な利己主義を志向。自己の欲求満足を善いことととらえる。

このレベルでは何が正しく何が悪いかを自己中心的に判断する。

レベル2……慣習的水準

段階3……よい対人関係の維持への志向。他者からの是認を求め、他人を喜ばせ、助けることを志向する。ステレオタイプ的で、他者に同調する。

段階4……義務を果たすことや、既存の社会秩序や法の維持への志向。

このレベルでは、皆の考えや、権威者の命令や、相談で決めた決まりなどが正しいか悪いかの基準になる。

レベル3……原則的水準

段階5……平等の維持、社会の契約（自由で平等な個人同士的一致）への志向。

段階6⁴⁾……良心と原則への志向。相互の信頼と尊敬への志向。

このレベルでは、正しいかどうかは、客観的原理、つまり、その人が論理的に考えて構成した公正さ、自然的な権利、すべての人々のためのヒューマニズムなどについての普遍的な基準に準拠する。

Kohlberg の発達段階理論は、道徳性を正しいことをするかどうかというように「行為」の面からみようとせず、なぜその行為のほうが「正しい」と考えるのかというように道徳「判断」の面から見ようとする。そのような見方をすれば、罰せられることを避けるというような段階から、社会的に決められた「きまり」をまもるという段階や、社会的な契約に従うというような段階を経て、最終的には「公正」というような普

遍的な道徳原理に至る発達段階が、時代や文化に限定されることなく存在すると考えられている。

3. 「配慮と責任の道徳」と文化的差異

しかし、Kohlberg の「公正さの道徳」を至上の原理とする考え方に対して、Gilligan は、それとは異なる道徳的価値観、いわゆる「配慮と責任の道徳」が存在する事を指摘し、前者が男性に特徴的であるのに対し、後者は女性に特徴的であると主張した。

また、このような道徳原理に関わる差異は、男女間だけではなく文化的にも見られると考えることも可能である。山岸 (1976) は、日本の青少年はアメリカと比較して、早くに段階3に達するが、そこにとどまる期間も長い傾向がある、と指摘している。Kohlberg の言う段階3は、よい対人関係への志向を特徴としており、従来から日本文化の特徴とされてきたものと重なる部分が多いものである (e.g., 東, 1994)。日本におけるこのような道徳発達の傾向は、単なる文化的バイアスによる発達の遅速と捉えるよりも、むしろ、公正とは異なる道徳原理が機能している現れと捉えるべきものであるかもしれない。

なお、日本に特徴的に見られる対人関係重視の道徳判断は、単に日本にとどまらず、広く東アジアに共通した特徴である可能性も指摘できよう。方富喜・方格・Keller (1994) は、中国とアイスランドの7歳と9歳の子どもを被験者として、友情関係の社会認知的発達の比較文化研究を行った。特徴的な結果として、中国の子どもたちは、Kohlberg の第3段階に到達する以前から、利他や関心の道徳判断が見られることが明らかにされた。これは、良好な人間関係の維持への志向が、中国においても道徳判断の際の重要な要因となっていることを示す一つの例だと考えられよう。

ところで、配慮や責任といった人間関係への志向が道徳判断に影響することは、後に Kohlberg からも部分的に認めるようになった。ただし、そうした影響はあくまで「ソフトな」発達の变化にかかわるのみで、公正を最高の価値とする「ハードな」発達段階は、なお普遍性を持つものであるとの主張は堅持されている (Kohlberg, Levine, & Hewer, 1983)。Kohlberg らの主張する「ハードな」発達段階の仮定 (理論) は、哲学的前提条件と緊密に結びついたものであり、経験的データによって反証可能なものとは必ずしも言えない。それゆえ、Kohlberg らの提起する発達段階と本研究の実証的データとの間に何らかの齟齬が見られたとしても、あくまで示唆的なレベルのものと思えるべきかもしれない。ただし、Kohlberg からも、公正の価値が普遍的な意義を持つものとしてとらえられるための基礎には、人間関係の中での適切な役割取得が重要な役割を果たす事を指摘している。人間関係への志向にみられる文化的差異に着目することは、道徳性発達を

理論的に考察する上でも、一定の貢献をなすものと考えられよう。

4. 本研究の目的

以上のような問題意識をふまえた上で、研究を進めるに当たっては以下のような目的を設定する。

目的1: Kohlberg の道徳発達理論では、文化が異なっても理論に依拠する発達段階の順序性は普遍であるとされているが、他方で、文化的特殊性を重視する立場からの批判も存在する。そこで本研究では、先行研究の少ない中国においても発達の順序性仮説は妥当性を持っているかどうかを検討することを第1の目的とする。

目的2: 先述したように、日本と中国では道徳判断において対人関係を重視する価値意識が関与する傾向が強いという点での共通性が見られると仮定されるが、公正観の発達傾向を直接比較検討した先行研究は見られないようである。そこで、Kohlberg の理論に基づき、公正観の発達に関する日中間の比較を行うことを第2の目的とする。

目的3: 対人関係を重視するという点で日本と中国は共通性を持つといっても、人間関係の質が日本と中国では異なっていることが考えられよう。ここでは試みに、Lebra (1973) の行った対人関係への投資に関する日中比較の先行研究を参考にしつつ、両国青年の対人関係意識がどのような特徴を持ち、それが道徳判断の発達にどのような影響を与えているか検討することを第3の目的とする。

方 法

被験者:

中国の被験者総計は383名、その内訳は、大学生 (西安交通大学および陝西師範大学) 合計195名 (男性108名、女性98名)、高校生 (西安交通大学付属高等学校) 合計98名 (男性52名、女性46名)、中学生 (西安交通大学付属中学校) 合計90名 (男性48名、女性42名) であった。

日本の被験者総計は366名、その内訳は、大学生 (名古屋大学及び愛知教育大学) 合計207名 (男性110名、女性97名)、高校生 (松蔭高等学校 (名古屋市)) 合計82名 (男性42名、女性40名)、中学生 (名古屋港明中学校 (名古屋市)) 合計77名 (男性36名、女性41名) であった。

質問紙:

本研究では、以下の二つの質問紙を用いた。
(1)道徳判断質問紙: 山岸 (1980) の作成した日本の青年の道徳判断発達の測定ための質問紙 (DIT 日本版) に含まれる6つの例話の内から4つを選んで使用した。各例話の葛藤の内容は、以下の通りである。
例話1: 癌で死にかかっている妻を救うために盗みを

犯してまで高価な薬を手に入れるべきかどうか。

例話2：苦痛の激しい末期症状の患者の願いを聞き入れて安楽死をさせるかどうか。

例話3：改心して社会に貢献している脱獄囚を告訴するかどうか。

例話4：盗みと詐欺とではどちらがより悪いか。

各例話ごとに、それぞれの葛藤状況を解決することと関連する11ないし12項目の事柄が列挙され、被験者は、重要と思われる順に4つまで項目を選択することが求められた。この選択項目は、それぞれ道徳発達の各段階における価値指向性を代表するものであり、どの項目が選択されたかによって、被験者の位置する道徳発達の段階を評定しようとするものである。

なお、得点化の方法および段階評定の基準は、山岸(1980)に基づいておこなった。⁵⁾

(2)対人関係価値意識質問紙：Lebra(1973)「報酬の公正と道徳的投資の比較研究」に基づいて、「忍耐への報酬」、「親切への報酬」と「理想家庭を築くために」という3つの質問を選び4つの答えを用意し、1番目から4番目につながり具合のよいものをそれぞれ選択させた。

第1問「忍耐への報酬」を、具体例として示す(なお、第2問以下の設問と選択肢カテゴリーは、表3を参照されたい)。

「未完成の文に続く単文をそれぞれ4つ作りまし。文のつながり具合がよいと思われるものから順に、番号を記入して行って下さい。(以下略)」という教示文の後、「1.もしあなたが会おうすべての苦難を耐えることができたとしたら」という未完成文を提示し、選択肢として、以下の四つの単文を列挙して示した。

- (1)あなたはきっと、後に成功するでしょう。
- (2)あなたには、よい暮らしができる日がくるでしょう。
- (3)あなたは忍耐強い人になるでしょう。
- (4)あなたの喜びは大きいことでしょう。

なお、被験者には4つの単文のすべてを対象とした重要度のランクづけを求めたが、本報告では、最重要とされた項目のみを対象とした分析を行っている。

二つの質問紙共に、日本語版を作成した後、筆者の内の一人(金美玲)が中国語への翻訳を行った。さらに、元の日本語版との意味の相違がないかどうかを、2名の日中両国語に堪能な研究者に依頼してチェックをしてもらい、必要な箇所については訂正を行った。手続き：上記2種類の質問紙を、各被験者の所属する学校の授業時間を利用して集团的に実施した。回答所要時間はおよそ30分～1時間であった。

調査時期：1996年5月～7月。

結果と考察

1. 中国における道徳性発達段階の検討

(1) 年齢群間の比較：学年別の各段階毎の人数比は表1および図1、国別、学年別及び性別のTD値の平均は表2の通りであつた。なお、TD値はいわば質問紙の総得点であり、この値が高い被験者ほど、高い段階に位置する項目を選択する傾向が強いことを示している。得点化及び段階区分の方法は山岸(1980)にもとづいている。

中学生、高校生、大学生いずれも段階2に位置する比率がゼロになっており、段階3と段階4に位置づけられたものが一番多かった。しかし、注目すべきことは、段階5に位置する人数の比率は、中学生で一番多く、大学生がもっとも少なかった。全体のTD値は、中学生、高校生、大学生で差がほとんどなかった。

例話2と例話3の段階は年齢とともに上がって行く傾向が見られるが、例話1では、中学生の段階値が一番高く、大学生の段階値が一番低かった。例話4では、高校生の段階値が高かった。

段階2は報酬や利益を求め、素朴な利己主義を志向するものである。自己の欲求満足をよいことととらえる。中国の青年たちの道徳発達は、早くにこの段階を越えて、その先の段階に進んでいる。この傾向は、方ら(1994)の比較研究で、中国の児童とアイスランドの児童を比べた結果では、中国の7～9歳児ですでに関心の道徳が見いだされる結果と同じである。西洋社会が個人の利益を重視するのに対して、中国では良好な人間関係の確立と維持を重視する。利他的あるいは関心の道徳が特に発達していると考えられる。段階3の傾向が強く、他者への期待(ステレオタイプのな“よい子”)や、よい対人関係の維持への志向をもつものが多いのであろう。中国には昔から“仁者愛人”という言葉がある。つまり慈善と博愛である。これは人間同士の良好な関係ということを意味しているが、現代の中国でも、他者への関心を人間としての非常に重要な価値基準としていっていると考えられる。段階4の、義務を果たし与えられた社会秩序や法の維持への志向を持つものも多い。この段階の人数比率を見ると、学年順に上昇する傾向が見られる。このような結果は、中国の青年が年齢の増加とともに社会的な役割を重視し、法律の概念、社会への義務など責任を重視するようになるからだろう。段階5のデータを見ると、興味深い。中国の中学生は比率がかなり高く(22.2%)、逆に高校生と大学生は比率がほとんど同じで、中学生より低かった(それぞれ13.3%、13.8%)。この結果は、Kohlberg理論にあてはまらない。全体的に見れば、中国青年の道徳判断はKohlbergの予想とは異なり独自の発達傾向を示していると言えるだろう。

(2) 男女差の検討：TD値については、男女とも学年

表1. 国別, 学年別及び男女別にみた道徳発達段階の人数比(%)

国	学年	性	段階 2	段階 3	段階 4	段階 4.5	段階 5	混合型
中国	中学	男	0	50.5	18.8	2.1	14.6	14.0
		女	0	23.8	28.6	0	31.0	16.6
	高校	男	0	34.6	26.9	0	9.6	28.9
		女	0	34.8	23.9	0	17.4	23.9
	大学	男	0	33.3	25.0	0	13.9	27.8
		女	0	34.5	26.4	1.2	12.6	25.3
日本	中学	男	2.8	33.3	25.0	5.6	0	33.3
		女	0	34.2	22.0	4.9	2.4	36.5
	高校	男	2.4	35.7	19.1	2.4	19.1	21.3
		女	0	27.5	15.0	0	30.0	27.5
	大学	男	0	22.7	19.1	0.9	24.6	32.7
		女	1.0	17.5	17.5	2.1	33.0	28.9

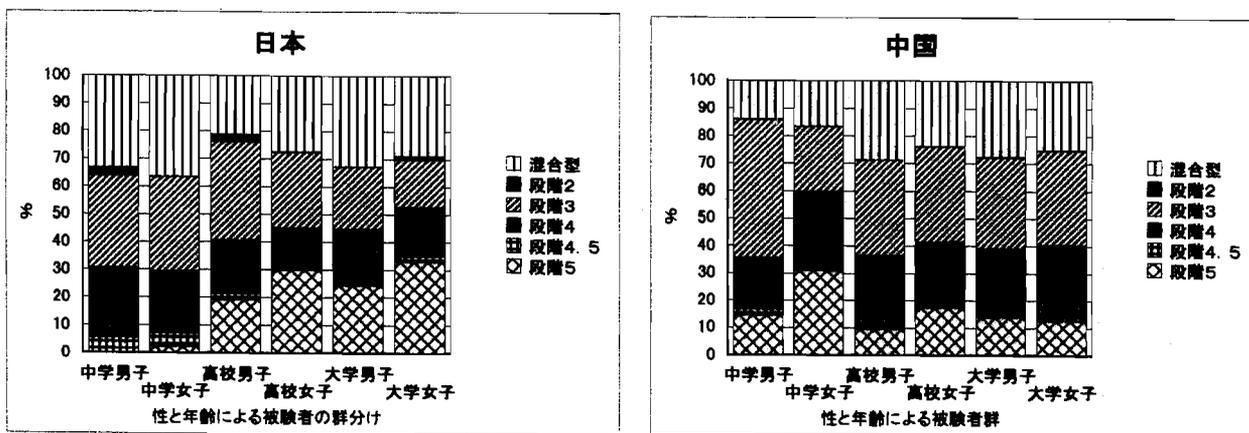


図1 国別, 学年別及び男女別にみた道徳発達段階の人数比(%)

表2. TD値の国別, 学年別及び男女別平均

	中国			日本		
	中学 (n=90)	高校 (n=98)	大学 (n=195)	中学 (n=77)	高校 (n=82)	大学 (n=207)
男子	3.98 (0.28)*	4.02 (0.28)	4.03 (0.25)	3.78 (0.24)	4.04 (0.30)	4.14 (0.27)
女子	4.10 (0.26)	4.03 (0.30)	3.99 (0.25)	3.38 (0.30)	4.12 (0.31)	4.20 (0.24)

*()内は標準偏差

表注 男女毎に行った国別×学年別の2要因分散分析結果を以下に示す。

男子: 国別 n.s. 学年別 p<.001 交互作用 p<.001
 女子: 国別 p<.01 学年別 p<.001 交互作用 p<.001

表3. 価値意識質問紙最重要項目選択者比率(%)

第1問 忍耐：「もしあなたが出会うすべての苦難を耐えることができたとしたら」				
選択項目	1. 成功	2. よい暮らし	3. 忍耐強い人	4. 大きい喜び
日本	38.0	12.8	24.3	24.9
中国	39.4	15.4	35.8	9.4

第2問 親切：「もしあなたが、他の人に親切にしたとしたら」				
選択項目	1. 直接返報	2. 間接返報	3. 内心の満足	4. 社会利他
日本	34.4	18.0	30.3	17.2
中国	31.1	6.3	50.7	12.0

第3問 理想家庭：「理想家庭を築くには」				
選択項目	1. 相互寛容	2. 忍耐	3. 責任	4. 経済計画
日本	57.9	10.1	26.0	8.0
中国	61.4	0.5	36.0	2.1

間の有意差はなかった(男子：F=2.27, df=2/205, n.s.; 女子：F=2.65, df=2/183, n.s.)。しかし、男女別に詳しく見ると男子の方は、年齢の増加とともにすこし上がって行く傾向が見られるが、女子の方は全体的に年齢の増加とともに下がって行く傾向が見られる。このような結果は、中国でも男子の方は Kohlberg の理論的な発達順序性とある程度一致していると言えるが、女子の方は Kohlberg のような志向が見られないことを意味している。各段階の発達傾向を見ると、高校生と大学生では男女差があまりなかったが、中学生の男女差が目立った。段階3と段階5の比率も男女差が大きい。特に、中学生女子の段階5が非常に多い。

以上まとめるならば、全体的には、中国青年の道徳判断の発達傾向は、年齢とともに段階が高くなって行く傾向がみられず、Kohlberg の論理的な発達順序と一致しないことが示唆された。

2. 道徳発達に関する日中間の比較

次に、日本と中国における青年の道徳判断発達を比較検討したい。すでに見たように、表1では中国青年の発達は年齢と共に段階が高くなって行く傾向が見られないのに対し、日本の青年の発達は年齢と共に段階が高くなって行く傾向が見られた。コールバーグの発達の順序性は中国においてははっきりしていないのに対し、日本においては妥当性をもつことが明らかにされた。またTD値の結果(表2)でも、日本では学年があがるにつれて得点が高くなる傾向が見られるが、中国ではその傾向が必ずしも明確ではなく、特に中国女子では年齢が高くなるほどTD値は低くなるという結果であった。まとめるならば、日本の結果は日本での先行研究である山岸(1976)の結果と一致していたが、中国における発達の变化は、「1.」でも述べたように、

Kohlberg の枠組みに必ずしも当てはまるものではなかった。

本研究の結果から各国別の特徴として以下の点をあげることができる。中国では、(1)中、高、大学生のいずれでも段階2の比率はゼロになっており、どの年齢群でも段階3の志向が多い。(2)高校生と大学生では、レベル2(段階3, 4)が非常に多いが、段階5はあまり多くない。(3)中学生では、段階5が大学生と高校生よりずっと多い。また日本では、(1)年齢が高くなるにつれて発達段階も高くなる傾向が見られる。(2)中学生では段階5がほとんど見られない。(3)全体にレベル2(段階3, 4)が優勢であり、特に段階3が多い。

これらの特徴からみると、まず、中国と日本で共通していることは、全体的に段階3の志向が多い点である。しかし、中国と日本の文化の特徴を考えると、この段階3は同じかどうか検討の余地があろう。日本の段階3は、山岸(1976)によれば、日本文化の特徴とされるものと内容的に似ていると考えられている。つまり、「よい対人関係の維持を正義とし、他者からの是認を求め、他者を助け喜ばせることや大多数のものがもつステレオタイプの“よい”イメージに志向する」段階だが、それは、日本文化の特徴とされる、世間の目を気にかける「恥の文化」、個人的対人関係を重視する「タテ社会」、「義理と人情の文化」などと、内容的に重なる部分が多いと思われるのである。日本と対比して、中国独自の段階3の志向について内容的にいくつかの解釈が考えられる。第1に、中国社会は昔から、「以和為貴(和をもって貴しとなす)」とか、「己所不欲、勿施於人(自分の欲しないことを人に求めてはならぬ)」という価値を重んじる儒教文化の伝統をもっている点である。人と人の親和を大切にする価値観の影響があると思われる。ただしこの点は、ある程度日本の文化的特徴と重なるかもしれない。第2に、中国で

は、よい対人関係を維持することは、「社会資本」投資として考えられている可能性もある。経済発展の急激な進行に比べ、公平性を確保するための社会システムの改善や法的整備が未だ必ずしも十分とは言えない現状のもとで、人々は日常生活の中で自分の利益を確保し身を守るために、人間関係を大切にしているという側面があるのではないかと推察される。

また、日中青年は道徳判断の際に注目した価値の点に違いが見られた。すなわち「権利」という言葉がある項目は日本人に選ばれやすい傾向がみられるが、それに対して、中国青年は「義務」を行動の価値基準として志向する傾向が見られたのである。この違いには社会経済体制の差異が反映しているのではないかと推察される。

最後になるが、中学生における発達段階の日中間の差が大きいことが注意を引く。日本では段階5がほとんどみられず、わずかながら段階2が存在するのに対して、中国では段階2が見られず、段階5の比率は日本の高校生に似ているといつてよい。⁹⁾

3. 対人関係の価値意識に関する日中間の比較

本研究では対人関係についての日中比較も行った。研究の結果から見ると、以下の特徴が指摘できる。(1)「忍耐」に対して、中日両国の青年達は成功と目標の達成の点ではほぼ同じ傾向が見られるが、日本の青年は「忍耐」に対する内心の満足感が強く、それに対して、中国青年は「親切」に対する内心の満足感が強い。(2)「親切」に関する結果では直接返報への期待には中日両国の青年の間であまり差がなかった。しかし、日本の青年は間接返報への期待は高かった。(3)「理想家庭への志向」では、日本人はお互いの忍耐を重視するのに対し、中国人は家庭への責任をもつことを重視する。

これらの結果は多少 Lebra (1973) のものとは異なっている。Lebra の調査結果によると、忍耐に対して中国人は成功への志向が多いが、日本人は間接的な返報に志向し、また内心の満足を重視する。親切への報酬として何を期待するかという点では、中国人は直接返報への期待が大きい、日本人で最も多いのは内心の満足であった。つまり、日本人は忍耐に対しても、親切に対しても、いわゆる報酬公正の自然法則を信じている。言い換えれば、日本人は人間の忍耐には必ずよい結果が生じると考えていることになる。Lebra は、日本人のこのような傾向に対してそれを論理的抑制によるものと考えた。

しかし、本研究は Lebra の結果と違って、日本の青年は忍耐への報酬では内心の満足感が高いものの、中国の青年は親切への報酬では内心満足感が日本の青年よりも高いことが明らかにされた。この他者への親切や忍耐における「与える—もらう」という人間関係の上で、中国と日本の青年は「他者への配慮と責任の道

徳」、つまり、コールバーグの言うよい対人関係を維持する志向が共通していると捉えることができるのではないだろうか。

ただし、その現れ方は微妙に異なっている。耐えることで「大きい喜び」に志向する傾向がやや高いことに見られるように、日本ではどちらかというと忍耐といった受け身的な関わりが重視されるのに対して、中国では、親切に代表されるような積極的な対人的関わりを重視する傾向があるといえるのではないだろうか。道徳発達段階に関わる考察で、段階3が多いことから対人関係に志向する傾向が日中間で共通しているものの、その内容には文化的背景が異なる可能性があるとして解釈したが、対人関係への志向性に見られる上述したような違いは、道徳的判断における対人志向性の内実の差異にも影響を与えているかもしれない。

4. 今後の課題

なお、考察の中ではふれることができなかった幾つかの論点を整理しておきたい。

(1)中国の中学生の発達はデータによると、全体的に高校生や大学生より段階5の比率が高く、特に女性の方にその傾向が顕著であった。それは、一般的な性差の問題なのか、教育に関わる問題なのか、あるいは、別の要因が関与しているのか、検討すべき論点と言える。(2)幾つかの先行研究では、中国においても Kohlberg の発達理論の順序性が妥当であることを示すものがある。しかし、本研究では Kohlberg の発達理論は中国においては当てはまらない結果となっている。どのような調査方法上の問題がそうした差異を生み出したのか、さらに追求する必要があると思われる。(3)本研究の第2調査は、Lebra の結果とかなり異なっている。それは、方法上の問題なのか、世代差を含む被験者の問題なのか。

以上の諸点が今後の検討課題として残されている。

注

- 1) 本報告は、第二著者である金美玲の愛知教育大学における修士論文(1996年度提出)の一部に基づいている。なお、本研究報告掲載に当たっては、第二著者の同意に基づき、第一著者である竹内謙彰が修正及び加筆を行った。また、データの一部は、日本教育心理学会第39回総会(1997年9月)において報告された。
- 2) 現所属なし。
- 3) なお本研究では、道徳判断の発達段階を確定するにあたって、Kohlberg らの用いたインタビュー法ではなく、より多くのデータを短期間に収集することを企図して質問紙法を採用した。簡便なデータ収集法を用いたという意味でも、本研究はあくまで探索的なものである。
- 4) ただし、後に Kohlberg らは、第6段階が存在している実証的根拠が必ずしも明確でないことを認め、この段階についてはもっぱら理論的、哲学的考察の対象となっていると述べている(Kohlberg, Levine, & Hewer, 1983)。

- 5) 質問紙による段階評定では、被験者は段階2から5までのいずれかの段階に分類されるかあるいは混合型と評定された。
- 6) この点に関しては、中国における中学生データが、大学付属中学校から得られていることが影響を与えている可能性も否定できないことを付言しておくべきであろう。

引用文献

- 東洋 (1994) 日本人のしつけと教育—発達の日米比較にもとづいて—。東京：東京大学出版会。
- Gilligan, C. (1982) *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. (岩男寿美子 (監訳) (1986) もうひとつの声。東京：川島書店。)
- 方富喜・方格・Keller, H. (1994) 対友誼関係社会認知発展的跨文化研究。心理学報, 26, 44-49. (原文中国語)
- 北山忍 (1997) 文化心理学とは何か 柏木恵子・北山忍・東洋 (編) 文化心理学：理論と実証 東京：東京大学出版会, Pp.17-43.
- Kohlberg, L. (1971) From *is* to *ought*: How to commit the naturalistic fallacy and get away with it in the story of moral development. In T. Mischel, (Ed.), *Cognitive development and epistemology*. New York: Academic Press. Pp.151-235. (翻訳は永野 (1985) 所収)
- Kohlberg, L., Levine, C., & Hewer, A. (1983) *Moral stages: A current formulation and response to critics*. Basel, Switzerland: Karger. (片瀬一男・高橋征仁 (訳) (1992) 道徳性の発達段階：コールバーグ理論をめぐる論争への回答。東京：新曜社。)
- Lebra, S. T. (1973) Compensative justice and moral investment among Japanese, Chinese, and Korean. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, 157, 278-291.
- 永野重史 (編) (1985) 道徳性の発達と教育。東京：新曜社。
- 山岸明子 (1976) 道徳判断の発達。教育心理学研究, 24, 29-37.
- 山岸明子 (1977) 道徳判断に関する Kohlberg の理論とその発展。心理学評論, 20, 348-368.
- 山岸明子 (1980) 青年期における道徳判断の発達測定のための質問紙の作成とその検討。心理学研究, 51, 92-95.

(平成10年8月19日受理)